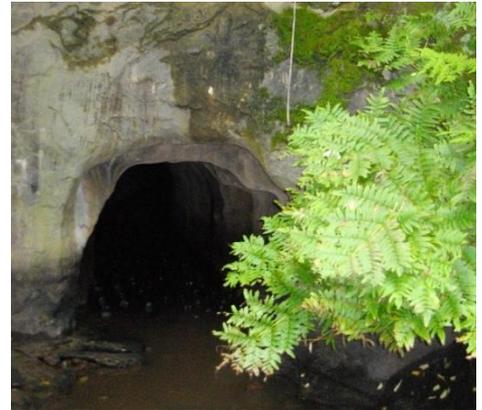


戸ノ口堰と飯盛山の洞門

戸ノ口堰は、猪苗代湖の戸ノ口の十六橋から引かれた堰で、蒲生忠郷（たださと）時代の元和9年（1623）に着工され、当初は八田野（はったの）堰と呼ばれていました。しかし、寛永3年（1626）には「八田家文書」によると、忠郷が将軍と上洛することになり財政が圧迫され工事は中止されます。その後、八田野村肝煎（きもいり）の内蔵之助（くらのすけ）（後に堰の功績から渡部から八田と改姓）は、私財を投じ2万人余で工事を継続し、約3500メートル掘削しました、寛永5年（1628）大野原の蟻塚（ありづか）付近で、財力が尽き、工事は中断しています。寛永9年（1632）には、加藤嘉明より堤佐太夫と一柳清四郎の2人に工事の再開が命じられ、寛永18年（1641）には八田野村まで幅約3メートル、深さ約1.7メートルで完成します。この堰の完成により、新田が開発され、寛永15年（1638）に漆沢村、翌年に稲荷原（とうかはら）村、万治3年（1660）に生井（なまい）村が誕生します。



明暦3年（1657）には、大野原から八田野堰の延長工事が始まり、元禄6年（1693）には、北滝沢村の古川惣治衛門の進言により若松城下まで延伸が決まり、小池金右衛門が奉行となり工事が進められ、この時から戸ノ口堰と呼ばれるようになります。天保6年（1835）には、八代松平容敬（かたまたか）と西郷頼母（たのも）の命により、堰の改修が始まり、八田野村の八田宗吉と、北滝沢村の古川伊喜衛門が責任者となります。工事は、会津藩士佐藤豊助（とよすけ）の指導により進められ、昼には旗で方位を、夜と洞門内部は提灯を使用して高低を測量、領内から延べ5万5千人を動員して進められました。



天保8年（1837）には、難関の飯盛山洞門が貫通します。洞門は、当初長さ80間余（145メートル）、現在は昭和59年に改修され、内部は湾曲し、長さは現在約168メートル、高さ1.7メートルから1.8メートル、幅1.8メートルあります。東側から入ると技術の未熟から掘削方向の間違いで途中、一部二方向に分かれていましたが、修正され今に至っています。今では、改修されたことから、当時の洞門の一部が内部の右側に一部残されています。天保9年（1838）には、若松城下まで完成し用水に使用されました。現在でも、会津若松市の大切な用水として使用され、国名勝の松平氏庭園や、若松城跡の堀にも一部使用され、若松郊外の水田を潤しています。明治24年には、戸ノ口堰用水普通水利組合が設立され、現在の会津若松市にある戸ノ口堰土地改良区に受け継がれています。 文責 石田明夫